

2024/6/23

ルカの福音書 講解メッセージ⑪

『ルカの福音書 5章 1-11節 神に近づく』

■試練

「群衆がイエスに押し迫るようにして神のことばを聞いたとき、イエスはガネサレ湖の岸べに立っておられたが、岸べに小舟が二艘あるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた。」（ルカ 5:1-2）

多くの人がイエス様のことばを聞くために押し寄せてきたその脇で、神のことばを聞くことなく、仕事をしている人がいました。

キエルケゴルという哲学者は、「働くために生きることは誘惑である」と言いました。生きるための糧を得ることが、人生の目的になってはいけません。それは人間をやめることだからです。人間と動物の決定的な違いは、人間は神に祈り感謝ができます。動物は糧を得るために生きます。しかし、人間にはもう一つの糧があります。神に祈り感謝することです。これが人間の本来の糧なのです。人間が人間として生きるためにには、神に祈り感謝するという糧が必要です。ですから、体を生かすための糧を優先することは、誘惑なのです。イエス様が最初に受けた誘惑もこれでした。

「すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」」（マタイ 4:3-4）

聖書は、神の国と神の義を第一とするように教えています。あなたは神のことばを食べる生活を送り、神のことばを通して心が養われているでしょうか。仕事を言い訳に礼拝を休み、神のことばを食べることをやめていないでしょうか。イエス様の脇には、ちょうどその誘惑に陥っている人たちがいたのです。

「イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。」
(ルカ 5:3)

シモンとは、後のペテロです。イエス様は、神のことばを聞かない人に対して、自ら近づき、ご自身の傍らで御言葉を聞くように導きました。それは、迷い出た羊を探しに行く羊飼いの姿です。私たちが誘惑に陥ったからといって、神は私たちを見捨てる事はありません。

これがペテロとイエス様の最初の出会いです。ペテロは初めから優秀だったわけではなく、神のことばを聞こうとしない誘惑に陥った者でした。イエス様は、その迷い出た羊を拾い上げたのです。こうして、ペテロは、神のことばを聞かざるを得ない状況になりました。

「話が終わると、シモンに、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」と言われた。」（ルカ 5:4）

話を聞き終わったペテロに、イエス様は、深みに漕ぎ出して魚をとるように言われました。これが試練です。試練とは、神のことばを信じるかどうかのテストです。ペテロは夜通し働いて、今日は魚が取れないことを知っていましたが、それでも御言葉に従うかどうか、神はテストなさったのです。

困難にぶつかった時、誰もが試練にあっています。人間の土台は神ですから、神は常に私たちに語りかけておられます。困難にぶつかった時、「あなたは私を信じるか」と問われ、「恐れるな」という神のことばを信じることができるか問われているのです。

「するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましょう。」そして、そのとおりにすると、たくさんの魚が入り、網は破れそうになった。そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるよう頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱいに上げたところ、二そうとも沈みそうになった。」（ルカ 5:5-7）

ペテロは信じる信仰を選択しました。すると、舟が沈みそうになるほどの魚が獲れました。神は信仰に対して、予想を超えた答えを与えてくださるのです。

■脱出の道

世の中では、試練という苦しみのことですが、聖書が教える試練は、誘惑とも訳せます。神を選択することをやめるかという誘惑です。クリスチャンが苦しみや困難に出会う時、それはすべて「あなたは私を信じるか」という試練になります。それは、神を信頼するためのテストであって、喜ぶべきものだと聖書は教えます。試練を通して、神との距離が縮まり、平安の義の実が結ばれるからです。

「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」

(ヤコブ 1:2-4)

しかし、苦しみの中で、神を信じることを選択しても、何の変化もないときがあります。その時、必要なのは忍耐です。信仰に忍耐が加わることで、さらに私たちは成長することができます。神は、耐えられない試練は与えないと言われます。なぜなら、必ず脱出の道が用意されているからです。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」(I コリント 10:13)

脱出の道とは、困難が解決されるということではありません。神を信じる信仰が与えられるということです。

私たちが苦しみを感じるのは、神のことばを信じることができないからです。神は困難に対して、必ず解決を与えると約束しておられます。それを信じ切ることができれば、苦しみに勝る喜びを得ることができますが、信じることができないと思い煩いが勝り、苦しみを感じます。また、人のことばに傷ついたり、腹を立てたりするのは、愛されよう、認められようとして、この世の見えるものに安心を求め、神のことばを食べずに人のことばをたよっているからです。つまり、苦しみは不信仰のゆえであり、不信仰は罪です。ですから、苦しみは罪の表現と言えます。

神が用意しておられる脱出の道とは、その罪が赦される道です。神のことばを信じられるようになり、人のことばよりも神のことばを信じられるようになることが脱出

の道なのです。それは、神がありのままのあなたを受け止めてくださるということなのです。見える問題が解決されることもありますが、神が本当に用意しておられる脱出の道は、見える解決ではありません。不信仰をいやす解決です。

ですから、私たちが苦しみに出会ったらしなければならないことは、がんばることではなく、自分の限界に気づくことです。あなたが本当に自分の限界、自分の弱さに気づくなら、神の前にへりくだって神に助けを乞うしかなくなります。それが脱出の道なのです。なぜなら神は、私たちの弱さを担い、私たちの弱さのうちに働く方だからです。あなたの重荷を神のところに持っていくなら、神が休ませてくださるのです。

罪とは神と分離した状態であり、罪の赦しとは神がご自分のもとに私たちを引き寄せてくださることです。苦しみに出会い、神に祈るごとに、神は私たちの罪を赦し、ご自分のもとに引き寄せてくださいます。すると、喜びが満ち溢れ、神のことばが自分の日々の糧になっていくのです。これが脱出の道です。あなたが神の前にへりくだって神に助けを請うことができれば、あなたは脱出の道を見つけたことになるのです。

私たちがこの世界で解决しなければいけない問題は、いかにして神との距離を縮めるかということです。あなたがこの世界で成功したり富を得たりすることに、神は何の関心もありません。なぜなら、この世界は朽ちるからです。しかし、一つだけ朽ちないものがあります。それは、神様との距離です。神を愛するとは、神との距離を縮めることです。この愛だけは滅びることがありません。そして、神との距離が縮まれば縮まるほど、希望が見えてきます。この希望が信仰です。信仰と希望と愛、これだけがいつまでも残るものです。神は、残るものに力を注ぐのです。それはあなたが自分の限界に気づくことでのみ、得られるものなのです。

人が苦しみという激しい試練の中にあって、本当に自分の弱さに気づき、神に助けを請うことができれば、その人は脱出の道を手にし、神のことばが食べられるようになります。喜びに満ち溢れるようになります。

「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」（IIコリント 8:2）

この人たちは極度の貧しさという困難の中にあって、苦しみを覚えていました。しかし、彼らはその苦しみによって、自分の限界に気づき、神に拝り頼む者となったのです。こうして彼らは、神によって引き上げられ、罪が赦され、神との距離が縮まり、神のことばをますます食べられるようになり、喜びが満ち溢れるようになったのです。日々の貧しさが解决したからではなく、まことの糧である神のことばをしっかりと食

べることができるようになり、まさに豊かになったのです。

神は、この世の成功や富を教えているのではなく、日々の糧である神のことばを食べられるようになることで、見えるところの困難が解決しなくとも、心が喜びに満ち溢れるようになると教えています。たとえ全世界を手に入れても命を損じたら何の得になるのかと、イエス様は言わされました。私たちを生かすのは神のことばです。その言葉が食べられなければ、何の意味もありません。

人間は、神のことばを食べるよう造られ、神に感謝し、神に祈ることができます。試練は、私たちが神から目を背けている過ちに気づかせてくれます。

神の目から見て貧しいのは、お金のないことではなく、神が与える日々の糧が食べられないことです。日々の糧である神のことばをなおざりにして、仕事を優先してしまう、ここに誘惑があるのです。

■シモン・ペテロの場合

「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」と言った。それは、大漁のため、彼もいっしょにいたみなの者も、ひどく驚いたからである。」

(ルカ 5:8-9)

多くの魚が獲れたペテロは、喜ぶどころか、イエス様に向かって「私から離れてください」とお願いしました。実は、人は神に近づけば近づくほど、苦しみを覚えます。聖なる方に罪人が近づくと、光によって闇が照らされ、罪を脱ぎ捨てさせようとするため、見える安心を捨てることができずに、人は苦しむのです。

私たちはこの世で安心を得るために、何かにしがみついて生きています。それは、人から愛されるということ、つまり人からの評判と、富、つまりお金とに大別されます。この二つの共通点は、神ではなく、見えるものに安心の根拠を置くということです。

しかし、神に近づくとは、見える安心を捨て、神を自分の安心の根拠にすることです。人はよく、この世でもっと成功するように、もっとこの世の富が手に入るようになると祈りますが、それは、見える安心が増えることを目的にした間違った祈りです。神が私たちに得させたいのは、見えるものによる安心ではなく、神を信じる信仰による安心です。

今まで手にしていた安心は、やがて滅びるものにすがっていたものだったため、本当の糧にはなりません。あなたにとって本当の糧は神のことばです。神の言葉を食べて、ここに安心の根拠を置きなさいと、神は私たちに切り替えを要求するのです。

つまり、神に近づこうとすればするほど、あなたが手にしてきた見える安心を手放さない限り、近づくことができなくなります。あなたがこの世の安心から手を離さなければ、どうして神が用意しておられる安心をつかむことができるでしょうか。イエス様は、神と富の両方に仕えることはできないと言われました。

ペテロは、イエス様に近づき、試練もパスしてさらに神に近づきましたが、そのことでますますつらさを味わうことになりました。それは、今まで手にしてきた安心を放棄しなければ、神の安心をつかめないというつらさです。

クリスチャンになるということは、苦しみをも賜るということです。なぜなら、クリスチャンは、神に近づく道しかないため、今まで手にしてきた見える安心を捨てさせられることになるからです。しかし、その先に真の喜びがあるのです。

ペテロの「主よ。私のような者から離れてください。」という言葉は、「私はもう限界です。見える安心を捨てることはできません。」ということです。このペテロにイエス様は、次のように答えられました。

「シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。「こわがらなくともよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。」（ルカ 5:10-11）

シモン・ペテロだけでなく、他の者たちも、「もう自分には無理だ」と申し上げたのですが、イエス様は「こわがらなくともよい」と彼らを受け入れられました。それは、そのままのあなたでよいということです。イエス様は彼らの罪を完全に赦し、彼らは罪が赦されるという経験をしました。神に受け入れられるということ、それが罪が赦される経験です。この経験によって彼らは、「何もかも捨てて、イエスに従った」とあります。つまり、罪を捨て去ることができたのです。

神に本気で従おうと思うなら、罪を捨てなければなりません。しかし、神は、私たちが罪を捨てられないことがわかっているので、その罪を赦し、「大丈夫だ。来なさい。」と励ましてくださいます。そうすると、私たちはその勇気を通して、今までできなかつたことができるようになり、喜びに満たされていくのです。

しかし、彼らは富を捨てることはできましたが、もう一つの人からの評判を捨てるることはできませんでした。これは、人から良く思われるることを常に優先してしまい、

神のことよりも人のことを思ってしまう弱さです。これを捨てない限り、神に近づくことができないのはわかっているのですが、できないのです。このことについては、イエス様が次のようにペテロを戒めておられます。

「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならぬと、弟子たちに教え始められた。しかも、はっきりとこの事がらを話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思はないで、人のことを思っている。」（マルコ8:31-33）

神のことばよりも人のことばを優先する。これを捨てるのはとても困難なことです。が、これを捨てることができた時、私たちは、「もはや私が生きているのではない。キリストが私のうちに生きておられる。」と告白することができるようになります。これが、十字架で死ぬということです。

神は私たちを十字架につけて殺したいのです。それは、この世の安心を殺したいということです。それは、神が与える日々の糧を食べるようになることで、本当に生きる者としたいからです。神のことばを食べず、働くために生きることが誘惑であるとはそういうことです。

私たちを本当の意味で生かしているのは、神のことばです。見える安心では何も解決しません。神のことばは苦しみに勝る喜びを与えてくれます。これが、神が与える脱出の道です。